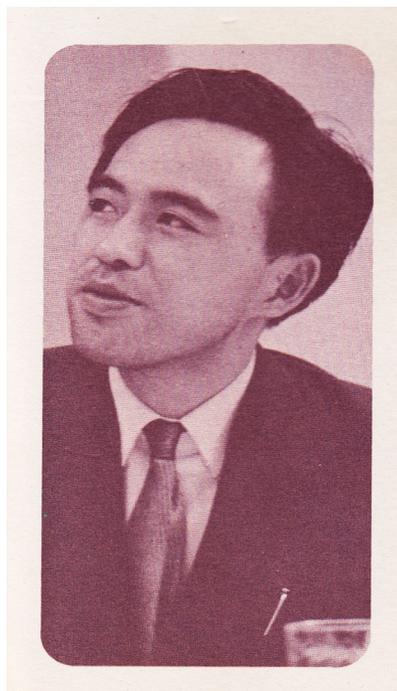


入沢康夫

『倅せ それとも不倅せ』から



入沢康夫氏 (1931年～)

目次

失題詩篇	2
鴉	3
キラキラヒカル	3
トデ・チ失踪	4
愛について	5
火口感傷	7
エオス 曙のために	8
北風の街で	9
或る夏の夜の出来事	10
売家を一つもっています	12

付記

著者略歴

失題詩篇

心中しようと 二人で来れば

ジャジャンカ ワイワイ

山はにっこり相好くずし

硫黄のけむりをまた吹き上げる

ジャジャンカ ワイワイ

鳥も啼かない 焼石山を

心中しようと辿っていけば

弱い日ざしが 雲からおちる

ジャジャンカ ワイワイ

雲からおちる

心中しようと 二人で来れば

山はにっこり相好くずし

ジャジャンカ ワイワイ

硫黄のけむりをまた吹き上げる

鳥も啼かない 焼石山を

ジャジャンカ ワイワイ

心中しようと二人で来れば

弱い日ざしが背すじに重く

心中しないじゃ 山が許さぬ

山が許さぬ

ジャジャンカ ワイワイ

ジャジャンカ ジャジャンカ

ジャジャンカ ワイワイ

鴉

広場にとんでいつて

日がな尖塔の上に蹲っておれば

そこぬけに青い空の下で

市がさびれていくのが たのしいのだ

街がくずれていくのが うれしいのだ

やがては 異端の血が流れついて

再びまちが立てられようとも

日がな尖塔の上に蹲っておれば

(ああ そのような 幾百万年)

押しえ切れないほど うれしいのだ

キラキラヒカル

キラキラヒカルサイフヲダシテキ

ラキラヒカルサカナヲカツタキラ

キラヒカルオンナモカツタキラキ

ラヒカルサカナヲカツテキラキラ

ヒカルオナベニイレタキラキラヒ

カルオンナガモツタキラキラヒカ

ルオナベノサカナキラキラヒカル

オツリノオカネキラキラヒカルオ

ンナトフタリキラキラヒカルサカ

ナヲモツテキラキラヒカルオカネ
ヲモツテキラキラヒカルヨミチヲ
カエルキラキラヒカルホシゾラダ
ツタキラキラヒカルナミダヲダシ
テキラキラヒカルオンナハナイタ

トデ・チ失踪

トデ・チは僕・見ているのも僕・おかしいかしら

犬ぞりにのって

遠く 遠く ごみのように見えている

トデ・チ君のばか

思念の二重踪跡は

霧結していて取り出せない

裏切られて

裏切られて

裏……

いいやそんなこと とても考えられぬ僕らの

凍結

——トデ・チ君 Sorrento へ帰るってさ

——そう Sorrento へ帰ればいいのかよ あの人

——だけど………本当にうまく帰れるかなあ ほんとにうまく

(帰れないたってかまわない)

第一その目指す方向だって

こっちだとおもうから こっちであるばかり)

——ね 君 トデ・チ君笑ったろうか

——風の音ヒユウウヒユウウウウってしたよ

泣いたんだ 言わないこっちゃない

ひしめきあって氷上におちる 燥いた 夜

犬ぞりにのって 遠く 遠く……

いや もう見えないトデ・チ君の

ばか

愛について

ぼくたちは歩く

ぼくたちは近づく

ぼくたちは語り合う

ぼくたちは歩き ぼくたちは語り合う

ぼくたちは語り合う

ぼくたちの愛について 未来について

そのために不可欠な 自由のこと

平和のこと

この焦土で それは何よりも静かな言葉

よる廃墟にふる雪よりも

砂丘の起伏よりも

それは何よりもおだやかに語られる言葉でなくてはならない

けれどもそれは

数知れぬ歯あとのくいこんだ銃床のように重く
溶鉱炉のように底ふかく燃え

海なりのように幅広く そうしていつまでも

絶えることのない言葉でなくてはならない

一瞬焼けただれる唇の上でも

色あせない言葉

どのような暗い厚みをも とおして聞える言葉

それを選び

ぼくたちはそれを血の中にとかし合う

ぼくたちは抱き合う

ぼくたちは本当だ

ぼくたちは歩く

世界の人間の数だけの方角を指して歩く

ぼくたちは歩く

ぼくたちは近づく

火口感傷

火山礫の上に

長いぼくの影

手を振ってみると

ああ影も手を振る

何のかかわりかあろう

過ぎた日々と今と

蒸気とけむりとの

果しらぬ奔騰

何のかなしみか湧こう

去った人のために

ただに眼をあげて

けむりの行方 追おう

火山の夕べ

濁った西の天に

日輪は尚も

燦然とかかる

エオス
曙のために

ぼくの夜を――

エオスのために

給仕盆を抱いているエオスのために

中甲板でテープを投げるエオスのために

スクリーンに溶けてしまうエオスのために

叱られているエオス 制服のエオスのために

いつもおどろいているエオスのために

不器用なタイプピスト エオスのために

お魚の横顔のエオス

せかせかと階段を上るエオスのために

もえ上るアイスクリームのため

火のような吐息のため

汚れたりボンのため

雨雲の中で死ぬ鷗の声のため

すばやい波紋のため

捨てられたルージュのため パステルのため

乱調子のピアノ ひるがえるスカートのため

ぼくの悪い遺伝のため

ぼくの拇指のため

ぼくの聞かされた 幾千の中傷と

ぼくの古ぼけたアルバムのために

あげよう

ああ みんな

ぼくの夜を

不眠の ぼくの夜を――

北風の街で

街には風が 吹いていた

男は 風邪を ひいていた

風が 男を 押していった

とある街角で 男は立ちどまる

風が止んだから

とある街角から 男は歩き出す

風がまた吹きはじめたから

とあるレストランの前で 男は立ちどまる

おなかが すいたから

とあるレストランのドアを 男は押す

何かたべたいと考えたから

街には風が 吹いていた

とあるレストランで男のした食事は

ほんの二皿か三皿ついただけ

男は風邪を ひいていた

ウエイトレスの一人も 風邪をひいていた

彼女の情人のコックは コーヒーの豆をひいていた

街には風が 吹いていた

男は立上って ドアを押した

風が 男を押していった

男を 風が押していった

或る夏の夜の出来事

附 その後日譚

とんだことである

コーヒーと一しよに

はずかしい記憶を

のみほして一文なしの

一人の男がテーブルを立った

とんだことである

死のうとおもって

海の方へあるいてくると

海はみるみるにげていつて

果しもない街並に

男はしゃがみこんでしまう

とんだことである

コーヒーと一しよに

みすぼらしい記憶を

のみほして一文なしの

一人の女がテーブルを立った

とんだことである

死んだ気になって

海の方へ歩いていくと

海はどこまでも とおのいて

せせこましい横丁に

一人の男が かくれていた

とんだことである

夏のある夜だ

死のうとおもった男と

死んだ気になった女と

とおい とおい 海の音は

古ぼけたオルゴールだ

死ぬことを見合せたばかりか

とんだことである

夏の夜のことだ

とんだことである

とんだことである

大いにとんだことである

死ぬことなんか忘れはて

それからは

大いに仕事に精を出し大いに内助の功をあげ

大いに富んだことである

大いにとんだことである

売家を一つもっています

—— 作文のおけいこ ——

・私が手の中にもっているものをあててごらんさい・彼は夜の間に出発する・その音楽教師は死んだ・彼はひたいに矢をうけた

・牛の角をおらんばかりの烈風・中央停車場でおまちします・あのしぶい顔をして彼がやって来る・休日は何日ですか・悪漢が一人婦人からハンドバッグをうばった・彼は承諾をためらう・且又彼女はとても美しい・花が地面にちつていた・我々は愛し合っていた・彼女はねまきのままでいる・ボルドオは西部フランスにおける非常にかっぱつな商港である・それらは箱の中にある・六月の美しい朝のことでした・囚人たちは百人づつ組を成していた・鳥は塔の方へとび去る・今朝の新聞で偶然彼の死を知りました・少年たちが上手な手ぎわで石を投げる・どういたしましたか・おたより下さい・一つの花もあります・彼は夜の間に出発した・休日は何日ですか・私は債務を果した・どういたしましたか・彼女はねまきのままでいる・私の時計は毎日十分おくれる・花が地面にちつていた・どういたしましたか・四五日私はあの女にあわないでしょう・草をたべて生きている動物はかなり多い・私は意見を変え

た・あいつはそれを自分で招いたのだ・どういたしまして・私は
鉾水をのむ・どういたしまして・お前は勇気がないぞ・どういた
しまして・私は死ぬほどつかれていた・どういたしまして・どう
いたしまして・あのしぶい顔をして彼がやって来る

〈付記 収録詩篇について〉

『倅せ それとも不倅せ』 正編Ⅰから――

「失題詩篇」「トデ・チ失踪」「鴉」

『倅せ それとも不倅せ』 正編Ⅱから――

「キラキラヒカル」

『倅せ それとも不倅せ』 正編Ⅲから――

「愛について」

『倅せ それとも不倅せ』 補編Ⅰから――

「火口感傷」「曙エオスのために」

『倅せ それとも不倅せ』 補編Ⅱから――

「北風の街で」「或る夏の夜の出来事」「売家を一つもっています」

(一九五五年・書肆ユリイカ)

入沢康夫(いりさわ やすお)

一九三二年、松江に生まれる。主な詩集に、『倅せ それとも不倅せ』(一九五五年)、『季節
についての試論』(一九六五年)、『わが出雲・わが鎮魂』(一九六八年)、『牛の首のある三十
の情景』(一九七九年)、『死者たちの群がる風景』(一九八二年)、『水辺逆旅歌』(一九八八
年)、『漂ふ舟――わが地獄くだり』(一九九四年)、『遐い宴楽』(二〇〇二年)、『かりのそら
ね』(二〇〇七年)など、詩論集に『詩の構造についての覚え書』(一九六八年)、『詩の逆説』
(一九七三年)などがある。